Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-06

時代変種と学習者変種の観点から考える日本語終助詞 : 時系列日本語小説コーパス「6121JFIC」と国際日本語学習者コーパス「I-JAS」を用いた統合分析の試み

石川, 慎一郎

(Citation)
統計数理研究所共同研究リポート,456:73-88

(Issue Date)
2022-03-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81013070

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013070

時代変種と学習者変種の観点から考える日本語終助詞
―時系列日本語小説コーパス「6121JFIC」と国際日本語学習者コーパス「I-JAS」を用いた統合分析の試み―

石川　慎一郎（神戸大学）
iskwshin@gmail.com

Sentence-final Particles in Historical and Learner Variants of Japanese
―An Integrative Analysis of 6121JFIC and I-JAS―

ISHIKAWA, Shin'ichiro (Kobe University)

Abstract

This paper quantitatively examined the usage of Japanese sentence final particles (SFP) by analyzing two corpus datasets: "6121 JFIC Corpus," a collection of Japanese novels published in 1961-2021, and "I-JAS," a collection of L2 Japanese learners' spoken and written outputs. Analytic foci were put on the (i) quantity of SFP, (ii) high-frequent SFP forms, and (iii) statistical classification of major SFP forms. First, regarding (i), it was revealed that the quantity of SFP occurring in Japanese literary works hardly changes during 60 years, while learners come to use more SFP as their proficiency levels go up. Next, regarding (ii), the analysis suggested a transition from *wa* to *no* in novels, and a shift to *yo* in learner outputs. Finally regarding (iii), the analysis showed that SFP can be classified into four types. Each of them seems to represent different styles of Japanese: (a) an archaic written style, (b) a modern written style closer to colloquialism, (c) a formal and nonspontaneous spoken style, and (d) a spontaneous and interactive spoken style.

Keywords

時代変種，学習者変種，統合分析，終助詞，6121JFIC，I-JAS

1. はじめに

日本語学の分野においては，日本語の時代間の差異が古くから関心を集めてきた。また，日本語教育の分野においては，学習者と母語話者，さらには，母語や習熟度を異にする世界の日本語学習者間の日本語運用の差異が広く議論されてきた。俯瞰的に見れば，これらは，広義の変種研究，つまりは，日本語の時代変種と学習者変種（国際変種）の研究であるとも言えるが，管見の限り，両者を接合させる試みはほとんど行われていない。

英語研究の世界では，非母語話者間のコミュニケーションに使用される English as a Lingua Franca（ELF）を 1 つの独立した英語変種とみなす立場がすでに確立しているが，日本語においては，学習者と母語話者の垣根を崩す試みはいまだ途上であるように思われる。しかしながら，野

田（2001）は，学習者が用いる「暑いでした」のような過去丁寧形が文法ルールとして合理的なものであるとした上で，「このような合理化は，将来，日本語全体で起こることも予想される」と指摘し，さらに，「学習者の『誤用』は，目標言語（今の場合は日本語）の弱い部分，つまり，不合理だったり複雑だったりする部分を突いて現れる」と述べている（pp. 60-61）。こうした視点に立てば，母語としての日本語の時系列変化分析と，学習者の L2 日本語分析を統合することには一定の理論的基盤が存在することとなる。

本研究では，終助詞に焦点を絞った上で，はじめに，日本語文芸誌に掲載された小説作品を 1961 年から 2021 年までの 10 年間隔でサンプリングした「1961-2021 Japanese General Fiction Corpus」（6121JFIC）（石川，2021）を用い，60 年間の使用状況の変化を概観する。次いで，世界の日本語学習者の発話・作文を体系的に収集した「International Corpus of Japanese as a Second Language」（I-JAS）（迫田・石川・李，2020）の対話（I）データを用い，中国語・韓国語・英語母語話者による使用実態を調査する。

2. 先行研究

終助詞の振る舞いは様々な分野の研究者の関心を集めてきた。終助詞は，本質的には機能的な語彙群であるが，たとえば格助詞などと比べ，(1)現実の話し言葉だけでなく，小説やドラマなどの「書かれた会話文」でも多用される，(2)文脈によってきわめて雑多な機能を担う，(3)性別や年齢などを示唆するキャラ語的性質を帯びる，(4)表記や発音面で新奇な改変を許しやすい，といった特有の性質を有する。こうした特徴をふまえ，終助詞を扱った研究はきわめて多岐に上るが，ここでは，(A)大型コーパスを用いた頻度研究，(B)時系列データを用いた頻度研究，(C)性差研究，(D)意味機能研究，(E)音声研究，(F)習得研究に区別し，研究事例の一部を紹介する。

まず，(A)大型コーパスを用いた頻度研究として，丸山（2015）は，「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（BCCWJ）と「日本語話し言葉コーパス」（CSJ）を用いて助詞全体の計量的な調査を行った。終助詞については，(1)実際の発話を集めた CSJ に出現する終助詞が 10 種であるのに対し（か・な・ね・よ・ぞ・わ・かしら・や・け・もの），BCCWJ にはさらに 17 種が加わって（さ・ぜ・の・い・じゃん・え・かな・くさ・ちょ・で・てん・ど・ねん・のう・ばい・べい・もが）27 種になること，(2)BCCWJ の大半のジャンルにおいて，全助詞群の中で終助詞の頻度は最も少ないが，知恵袋とブログでは頻度が上昇し，副助詞（や・など・か・までなど）・準体助詞を上回ること，(3)BCCWJ 中の終助詞の頻度はか＞ね＞よ＞な＞の＞わ＞さ＞ぞの順になること，(4)ブログでは異表記も多いこと（ナの 36%は異表記：なぁ，な～，なー，なァ，ナー），(5)CSJ では終助詞は準体助詞とともに対話（D グループ）と関係が深いこと，(6)講演より会話のほうが終助詞が多いこと，などが報告されている。

次に，(B)時系列データを用いた頻度研究として，松下（2019）は，市川森一氏によるテレビドラマの脚本を集めたコーパスを 1970 年代・80 年代・90 年代・2000 年代に分けて時代別に調査した結果，(1)終助詞の構成比は，2.37%＞1.93%＝1.93%＞1.71%と微減していること，(2)高頻度終助詞は「か＞よ＞ね」→「か＞よ≒ね」→「か＞よ＞の」→「か＞ね＞よ」のように変化すること，(3)男性人物が使用する高頻度終助詞は「か＞よ＞ね」の順で変わらないのに対し，女性人物の場

合は「よ＞わ＞の」→「の＞か＞ね」→「の＞わ＞よ」→「ね≒か≒よ」のように変化すること，(4)1970～1990 年代には「ヨ」「ネ」のカタカナ表記がみられること，などを報告している。

また，上記を発展させた松下・丸山（2019）は，2 種のテレビドラマ脚本コーパス（市川コーパス＋鎌田敏夫脚本コーパス）と「日本語日常会話コーパス」（CEJC）における終助詞の使用実態を調査した。その結果，(1)終助詞の全テキストに占める比率は市川コーパスのほうが多いこと，(2)市川コーパスでは「か＞よ＞ね＞の＞な」，鎌田コーパスでは「よ＞の＞か＞ね＞わ」の順になること，(3)CEJC では男女差が小さく，「ね＞よ」の 2 つで半数以上を占めること，(4)鎌田作品は，CEJC，つまり現代日本語会話に近く（男女差が小さい，女性も「さ」を使用，終助詞のバラエティが制約的），市川作品は多様な終助詞を使い分けてメッセージ性を強めていること，などが明らかにされた。

続いて，(C)性差研究として，後藤（1996）は，1993 年の毎日新聞データベースを調べた結果，典型的な女性文末詞とされる「かしら」の用例を 153 例見つけた。これらを子細に検討した結果，28 例は外国人女性の発話を記者が日本語に翻訳したもので，実際に発話された可能性があるのは 100 例程度であった。このうち，男性発話中の「かしら」が 9 例見つかったが，3 例は同一記者による記事であり，「使用例の約 4 分の 1 は記事中の見かけ上の話し手（書き手）に帰すことができ」ず，新聞記事テキストデータは，言語研究の資料としてみた場合には，「捏造」ないし「水増し」された部分があることを指摘している。

深尾（2019）は，名大会話コーパスで話者属性を加味して「わ」の使用状況を調査し，(1)女性話者の「わ」類使用率は 60 歳以上では 94%だが，10～50 代では 70～80%に低下すること，(2)男性話者の「わ」類使用率は 20 代が 67% と高く，同世代の女性話者を上回ること，(3)若い世代は反論・共感・軽口・冗談など，多面的な場面で「わ」を使用すること，などを明らかにした。

石川（2019）は，「BTSJ 日本語自然会話コーパス」の大学生対話データを分析し，(1)独占的ないし優先的に女性が使用している文末詞は 4 種（「かしら」「わよ」「のよ」「のね」）で，男性が使用するのは 5 種（「だぜ」「（だ）よな」「ぞ」「だろ」「ぜ」）であること，(2)文末詞使用の点で男女が二分されるわけではなく，男性文末詞を多用する一部の男性と，その他の男性および女性が融合した中立性の対立が見られること，(3)性差に加えて陳述における焦点の置き方（話者側に焦点を置いた断言・独白か，聴者側に焦点を置いた共感醸成型の発話か）が文末詞を区分するもう1つの軸になっていること，などを報告している。

また，(D)意味機能の研究に関して，言語学的観点からは，「よ」と「ね」，また，その複合形である「よね」のそれぞれの意味論的位相の研究が広く行われており，最近では，談話管理の観点から，話し手の管理下にある情報は「よ」，聞き手の管理下にある情報は「ね」で伝達されるという枠組みも提唱されている（滝浦，2008 など）。

千葉（2012）は，これらを BCCWJ，CSJ，BTSJ で調査し，(1)BCCWJ では 3 表現がブログや知恵袋で多いこと，(2)「よね」の頻度は「よ」「ね」より低いが，話し言葉的なジャンルで増えること，(3)「よ」の頻度は BTSJ＞BCCWJ＞CSJ 講演，「ね」の頻度は BTSJ＞CSJ 講演＞BCCWJ，「よね」の頻度は BTSJ＞CSJ 講演＞BCCWJ の順になること，(4)前節品詞パタンにおいて「よね」は「ね」より「よ」に類似すること，などを報告している。

崔(2015)は，BTSJ を用い，「ね」「よ」「よね」の用例を抽出し，談話機能の分類を行った。その結果，命題領域を示す機能と発話連鎖の効力により，「ね」については 5 種類，「よ」については 3 種類，「よね」については 3 種類の機能分類がなされた。

Ishikawa (2016)は，BCCWJ と CSJ を用いて「です＋よ／ね／よね」の使用状況を調査し，(1)頻度は「です＞「ですね」＞「ですよ」≒「ですよね」の順になること，(2)「です」の後に終助詞が後接する確率は，くだけた発話＞国会発言＞講義講演＞知恵袋＞ブログの順になること，(3)前節要素としては「ん」「の」「そう」などが多いこと，(4)共起語に基づく統計分類の結果，「ですよね」は「ですよ」よりも「ですね」に近いこと，(4)表現の使い分けはモダリティの強弱と，発信者・受信者間のフォーカスの 2 観点で決まること，などを報告している。

このほかの終助詞に関するものとして，平山(2015)は，BTSJ の日本人大学生会話における「かな」の用例を分析し，機能別に見た場合，疑い述べ立て(あの人独身かな)の用法が圧倒的に多く，以下，判断問いかけ(こういう書き方でいいかな)＞意思(私はコーヒーにしようかな)＞願望(あした天気にならないかな)の順になり，依頼(それ持ってきてもらえないかな)の用例は確認できなかったことを報告している。

一方，(E)音声研究として，市村(2015)は，「ノダよね」の用法を探るべく，「名大会話コーパス」における当該用法の具現形として「ンだよね」を抽出し，各発話意図を前提にした会話文を作成し，読み上げ実験を実施した。その結果，末尾の「ね」は，肯定反応を求める場合には上昇下降で，情報提示する場合には平坦型・アクセント上昇で発話されることを明らかにしている。

最後に，(F)習得研究として，山本・小森・本間・ラニガン(2017)は，コーパス分析システム Co-chu(cochu.org/)を使用して，中国人上級学習者(CS)と親しい日本人大学生の雑談，韓国人上級学習者(KS)と親しい日本人大学生の雑談，中国上級学習者と初対面の日本人大学生の雑談の 3 種のデータを多面的に分析した。その結果，終助詞に関しては，(1)「だよね」「そうだね」「そうだよ」のような文末表現が多用されること，(2)友人間の場合，母語話者の使用する終助詞は「ね＞か＞よ」の順だが，CS は「ね＞よ＞か」の順になること，初対面の場合，母語話者は「ね＞よ＞か」だが，CS は「か(とくに質問形)＞ね＞よ」となって優先使用形が変化すること，などの知見が報告されている。

朴・横山(2021)は，インタビューコーパスを利用して韓国語母語の日本語学習者の発話における「ね」の使用を調査し，(1)インタビュワーが「ね」を「必須」の意味(同意表明・要求，確認要求)で使うのに対し，インタビュイーは「任意」の意味で使うこと，(2) 上級上の学習者は，発話量に占める「ね」の比率が高いこと，(3)上級上の学習者は「任意」，上級下の学習者は「必須」の意味で「ね」を用いる場合に正用率が下がること，(4)上級学習者は「ね」の 2 つの機能を十分に把握できていない可能性があること，などを報告している。

吉田(2014)は，学習者の終助詞使用を 3 年間の縦断データで調査した。その結果，(1)使用頻度は「ね＞よ＞な＞よね」となり，「ね」「よ」 を習得してから「よね」が使用されること，(2)未使用→汎用・過剰使用→正用のパタンが見られること，(3)「よね」は未使用の段階から一気に過剰使用され，

それとともに「よ」「ね」が一時的に減少すること，(4)「ね」は初期は普通体に後節するが次第に丁寧体後接が増えること，などが明らかになった。

斎藤（2021）は，学習者の「ね」の過剰使用が押しつけがましく聞こえる場合があることを指摘した上で，I-JAS を用いた調査を行ったが，「ね」の使用頻度は母語話者＞国内自然環境＞国内教室環境＞海外環境の順で，必ずしも学習者の使用頻度は高くないことが示された。

立部・藤田（2019）は，インタビューデータを収録した日本語学習者会話データベース（注：論文中では「日本語学習者発話データベース」と記載）を用い，初級者の「ネ」の使用状況を調査し，(1)初級者は評価的文脈において形容詞に後接させて使用しやすいこと，(2)教室環境学習者にこうした傾向が顕著に見られること，などを報告した。

3. リサーチデザイン

3.1 目的と RQ

本研究の目的は，時系列小説データ（時代変種）と日本語学習者データ（学習者変種／国際変種）を統合的に解析し，日本語終助詞の使用実態を探ることである。なお，本研究は基礎調査として，計量面のデータ分析に焦点を当てる。本研究で解明しようとする研究設問（RQ）は以下の通りである。

RQ1 両変種において，終助詞全体の使用量（タイプ，トークン）はどのように変化するか？

RQ2 両変種において，高頻度に出現する終助詞にはどのようなものがあるか？

RQ3 両変種を統合的に見た場合，終助詞ならびに各変種はどのように区分できるか？

3.2 データ

時系列小説データとして，「1961-2021 Japanese General Fiction Corpus」（6121 JFIC）（石川，2021）を使用する。これは，日本の三大文芸誌に掲載された一般小説作品を母集団とし，1961 年から 2021 年まで 10 年ごとに 7 年をサンプリングポイントとして，各年につき，3 誌から 31 本の作品冒頭部（約 5,000 字）を抽出して構築したコーパスである。語数は各年約 10 万語，全体で 70 万語である。使用した形態素解析辞書は UniDic（現代語）である。なお，6121JFIC についてはオンラインの検索系が提供されているが，今回は筆者が所有するベースデータを利用する。

また，日本語学習者データとして，「International Corpus of Japanese as a Second Language」（I-JAS）（迫田・石川・李，2020）の対話（I）データを使用する。分析対象とするのは，海外教室環境で学んでいる，中国語（大陸・台湾）母語学習者 200 名（以下 CHN），英語母語学習者 100 名（以下 ENG），朝鮮語（韓国語）母語学習者 100 名（以下 KOR）と対照用の母語話者（JPN）50 名のデータである。学習者には，2 種のテストによる習熟度の情報が付与されているが，ここでは，J-CAT の総合スコア（聴解，文字・語彙，文法，読解の 4 セクション各 100 点，合計 400 点）に着目し，300 点以上（L300），250 点以上（L250），200 点以上（L200），150 点以上（L150），150 点未満（L100）の 5 段階に区分する。テスト開発者が公開している旧日本語能力試験スコア互換表（www.j-cat2.org/html/ja/pages/interpret.html）と，新旧日本語能力試験対照表

（www.jlpt.jp/sp/about/comparison.html）を参照すると，L300 はおよそ N1（上級前半），L250 は N2（中級），L200 は N4（中級前半），L150 は N5（初級後半），L100 は入門～初級相当と判断される。該当する学習者数は以下の通りである。

表 1 I-JAS の調査対象者話者数

	L300	L250	L200	L150	L100
CHN	16	77	75	30	2
ENG	NA	4	22	32	42
KOR	22	38	26	8	6
以上計	38	119	123	70	50
JPN	50				

3.3 手法

事前処理として，6121JFIC については，筆者が所有するベースデータを使って，終助詞頻度を表記形ベースで調査する。これにより，各種の異表記は別語として計量される。I-JAS については，国立国語研究所の運営するコーパス検索システム中納言上で品詞が終助詞となる用例を全例ダウンロードした後，母語・習熟度レベル別に頻度調査を行う。なお，6121JFIC の場合と同じく，分析は表記形単位で行うが，データを検証したところ，「さー」と「さあー」，「なー」と「なあ」，「ねえ」と「ねー」という表記のぶれが検出された。I-JAS の音声書き起こし作業を統括した佐々木藍子氏より，これらが明確な基準で区分されたものではなかったことを確認の上，いずれも「ー」に統一した。なお，いずれの場合も，形態素解析結果の確認と修正は行っていない。

RQ1 については，はじめに今回分析対象としたすべてのデータにおける終助詞の数を確認した後，時代変種別・学習者変種の習熟度別に終助詞の量をトークン（延べ語数）とタイプ（異なり語数）の 2 観点で調査する。I-JAS データのトークンは話者数で割り，1 人あたりトークンに調整するが，タイプについては，話者数が増えても線型増加するわけではないので，調整を行わない。

RQ2 については，変種別に上位 5 語を抽出し，内容的に検討を行う。

RQ3 については，変種内部区分を第 1 アイテム，主要終助詞を第 2 アイテムとする頻度表に対して対応分析を行い，終助詞の分類と，変種との関係性を検討する。対応分析とは，行列間の相関を最大化する軸（次元）を取り出し，通例，説明力の最も高い上位 2 次元を基準として散布図を作図し，各々のアイテムカテゴリーデータを 2 次元空間上に布置する多変量解析手法である。散布図上で近傍に布置されたデータは相対的に類似した性質を持つと解釈できる。まず，時代変種に関して，7 か年を第 1 アイテム，7 か年の総頻度が 4 以上になる上位 28 語を第 2 アイテムとする頻度表を分析対象とする。次に，統合分析として，産出者 22 群（小説 7 群，学習者 14 群，母語話者 1 群）を第 1 アイテム，学習者全体による総頻度が 4 以上になる上位 19 語を第 2 アイテムとする頻度表を分析対象とする。

4. 結果と考察

4.1 RQ1 終助詞使用量

まず，今回分析対象としたすべてのデータにおいて出現した終助詞（表記形）のトークンは30159 例，タイプは 66 種であった。

表 2 出現した終助詞表記形（全体頻度降順。縦線以降は全体頻度 1）

ね，か，よ，な，ねー，なー，かー，の，わ，さ，っけ，よー，ぞ，なあ，ねえ，かしら，い，もの，もん，じゃん，ぜ，や，やー，のー，で，かあ，ねん，さあ，さー，なア，っけー，なぁ，のう，よお，かしらん，もが，け，ぜー，なァ，ねェ，のん，ばい，べ，ょ，よう，よオ，わー，ん，バイ ｜ かし，かァ，ぜえ，ぞう，ぞオ，ぞー，たい，ちょ，てん，でー，ねエ，のぉ，よぉ，よォ，ら，イ，ネ

次に，各変種の内部区分ごとに頻度調査を行ったところ，以下の結果を得た。なお，時代変種のトークンは 1 作品あたり，学習者変種のトークンは 1 人あたりで表示している。学習者の習熟度別の比較では，3 種の母語話者のデータを統合している。また，学習者の母語別の比較では，学習者間で習熟度レベルごとの人数の違いが大きいため，人数が相対的に安定している L200 に限定して調査している。

図 1 時代変種（トークン）

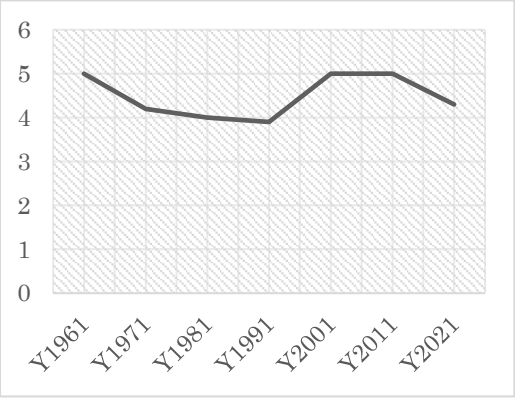


図 2 時代変種（タイプ）

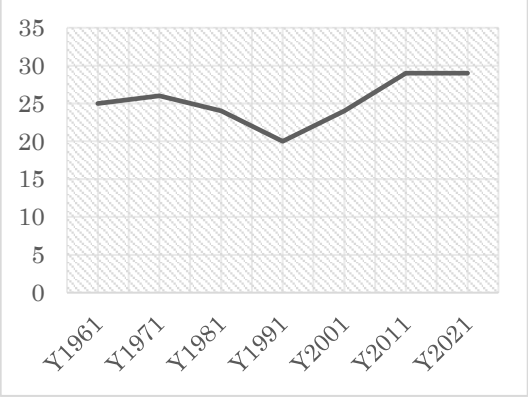


図 3 学習者変種：習熟度別（トークン）

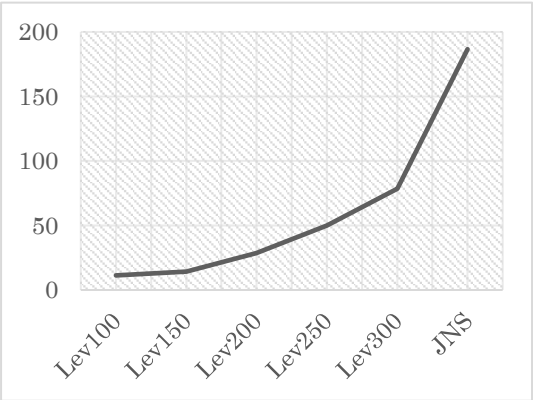


図 4 学習者変種：習熟度別（タイプ）

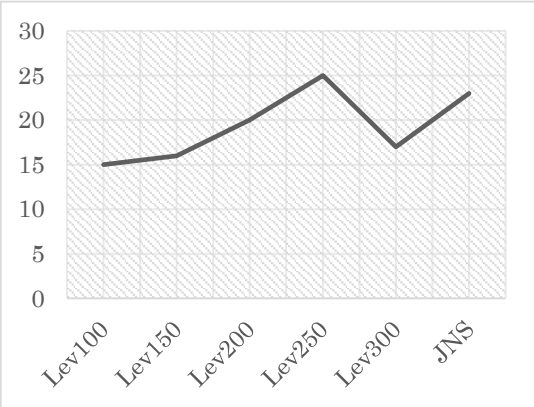


図 5 学習者変種：母語別（トークン）

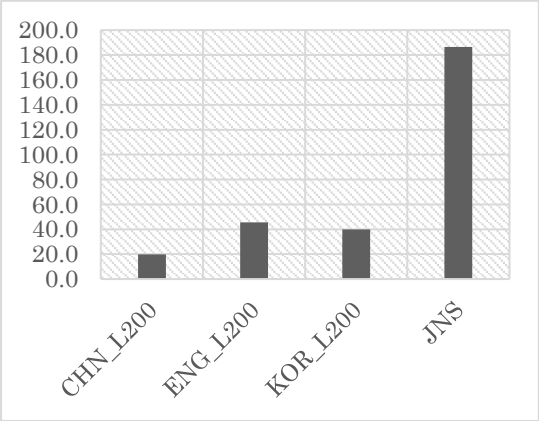
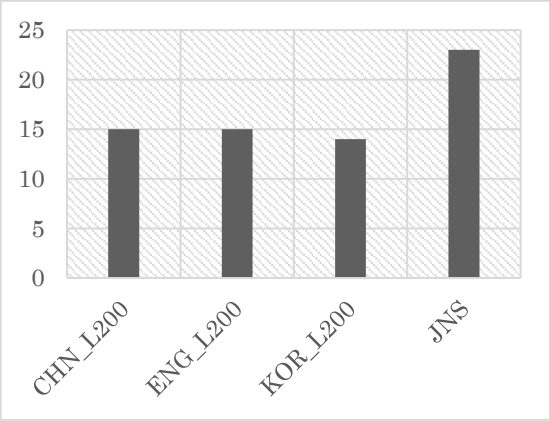


図 6 学習者変種：母語別（タイプ）



以上の調査により，(1a)日本語小説の終助詞のトークン数は 1961 年から 1991 年にかけて減少した後 2001 年に大きく上昇するが 2021 年にかけて再度減少しており，はっきりした増減傾向が見られないこと，(1b)タイプ数については 1991 年まで減少した後，2001 年以降上昇して 2021 年まで安定していること，(2a)学習者の習熟度別の終助詞トークン数は線型的に増加するものの，L300 段階でも母語話者の半分程度にとどまっていること，(2b)タイプ数については L100 から L250 まで増加した後減少するが，L300 の学習者数が少ないことを加味すると，およそタイプについても習熟度と呼応した上昇傾向が推定されること，(3a)学習者の母語別の終助詞トークン数は ENG＞KOR＞CHN となるが，最も多い ENG でも母語話者の 25％程度であること，(3b)タイプ数は 3 か国ともほぼ等しく，母語話者の 65％程度にとどまっていること，などが確認された。

4.2 RQ2 高頻度終助詞

まず，時代変種に関して，年代ごとに高頻度終助詞の内容を調査したところ，以下の結果を得た。

表 3 時代変種別高頻度終助詞

	Y1961	Y1971	Y1981	Y1991	Y2001	Y2011	Y2021
#1	か	か	か	か	か	か	か
#2	よ	よ	よ	よ	よ	よ	よ
#3	ね	ね	ね	ね	ね	ね	ね
#4	な	な	な	な	な	な	の
#5	わ	わ	わ	わ	の	の	な

以上より，(1)総じて高頻度終助詞は安定しており，1961 年～1991 年まで上位 5 語はすべて同じであること，(2)一方，2001 年以降になると，「わ」が上位 5 語から脱落し，代わって「の」が入ること，(3)「の」の頻度は 2001 年以降上昇しており， 2021 年には「な」を上回ること，などが確認された。1991 年と 2001 年の間に日本語小説において終助詞の選択にある種の変化が生じ，話者が女性であることを強く印象付ける「わ」から，より中性的な「の」への置き換えが進んだと推定される。

続いて，学習者変種に関して，習熟度レベル，また，母語ごと（L200 に限定）に高頻度終助詞の内容を調査したところ，以下の結果を得た。母語話者と重複する終助詞は太字で表示している。

表 4 学習者変種別高頻度終助詞

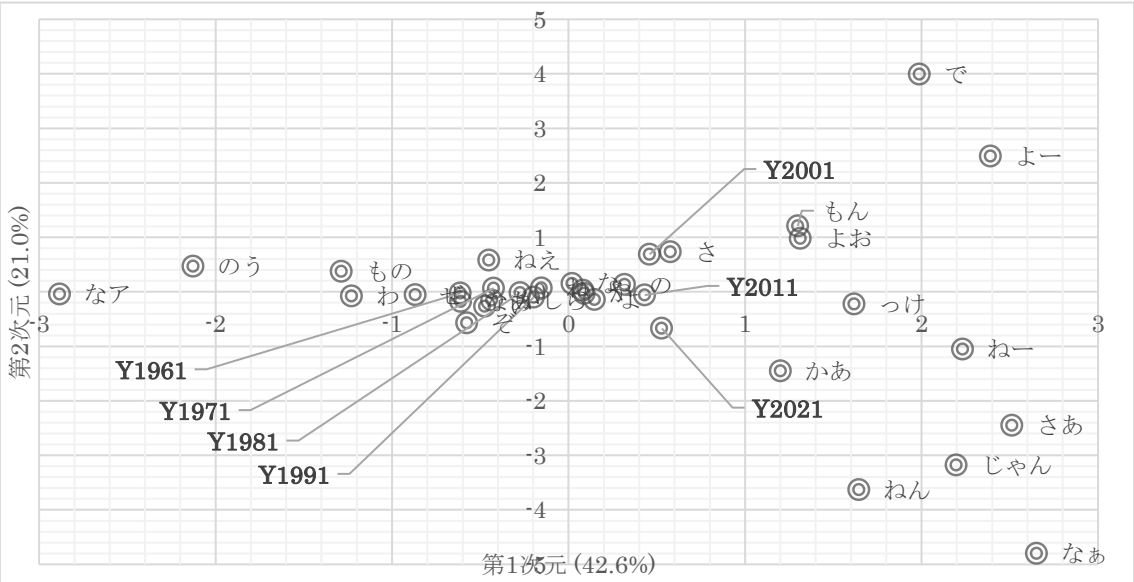
	L100	L150	L200	L250	L300	CHN	ENG	KOR	JPN
#1	**ね**	**ね**	**ね**	**ね**	**ね**	**ね**	**ね**	**ね**	ね
#2	**か**	**か**	**か**	**か**	**か**	**か**	**か**	**か**	か
#3	**な**	**ねー**	**な**	**よ**	**よ**	かー	**な**	**な**	ねー
#4	の	なー	**よ**	**な**	**な**	**よ**	**ねー**	**よ**	よ
#5	なー	かー	**ねー**	**ねー**	**ねー**	なー	**よ**	なー	な

以上より，(1)上位 2 語が「ね＞か」であることは全話者群で共通しており，母語話者・学習者間の差，学習者の習熟度間の差，学習者の母語間の差の影響が見られないこと，(2) 上位 5 語の内容は L100～L150 では母語話者とずれがあるが，L200 以降は（順位のずれはあるものの）一致すること，(3)母語話者の 4-5 位になっている「よ」と「な」について，L100～L150 では「よ」が入っておらず，L200 以降，「よ」が入ってくること，(4)上位 5 語範囲で母語話者が長音化するのは「ね」のみだが，学習者は「な」や「か」も長音化しやすいこと，(5)母語別では中国語母語話者に長音化がやや多く，上位語の内容という点では英語母語話者が最も母語話者に近いこと，などが確認された。この点をふまえると，終助詞の習得に関しては，「よ」の習得が課題になりやすいと言える。また，終助詞使用の発達に関しては，L150 と L200 の間あたり質的な変化が生じる可能性が示された。

4.3 RQ3 終助詞分類

まず，時代変種に関して，対応分析を実施したところ，以下の結果を得た。

図 7 散布図（時代変種データの対応分析に基づく）



全体は 2 つの軸で 4 分割され，第 1 次元（Z1，横軸）上で，1961～1991 年が左側に，2001 年～2021 年が右側に布置された。このことは，日本語小説における終助詞使用が 1991 年と 2001 年の間で質的に大きく変容したことを傍証する。また，第 2 次元（Z2，縦軸）は，1961～1991 年の分割には寄与していないが，右側で上部に 2001 年，中央部に 2011 年，下部に 2021 年分を区分している。右側の領域に関しては，上部から下部にかけて時代的に新しくなっていると解釈してよいだろう。

これらをふまえると，各時代区分を特徴づける小説の終助詞として以下が抽出された。なお，第 1 次元上で原点近傍の語は特定の年代との関係が希薄と判断し，表から除外している。

表 5 小説の各時代区分を特徴づける終助詞

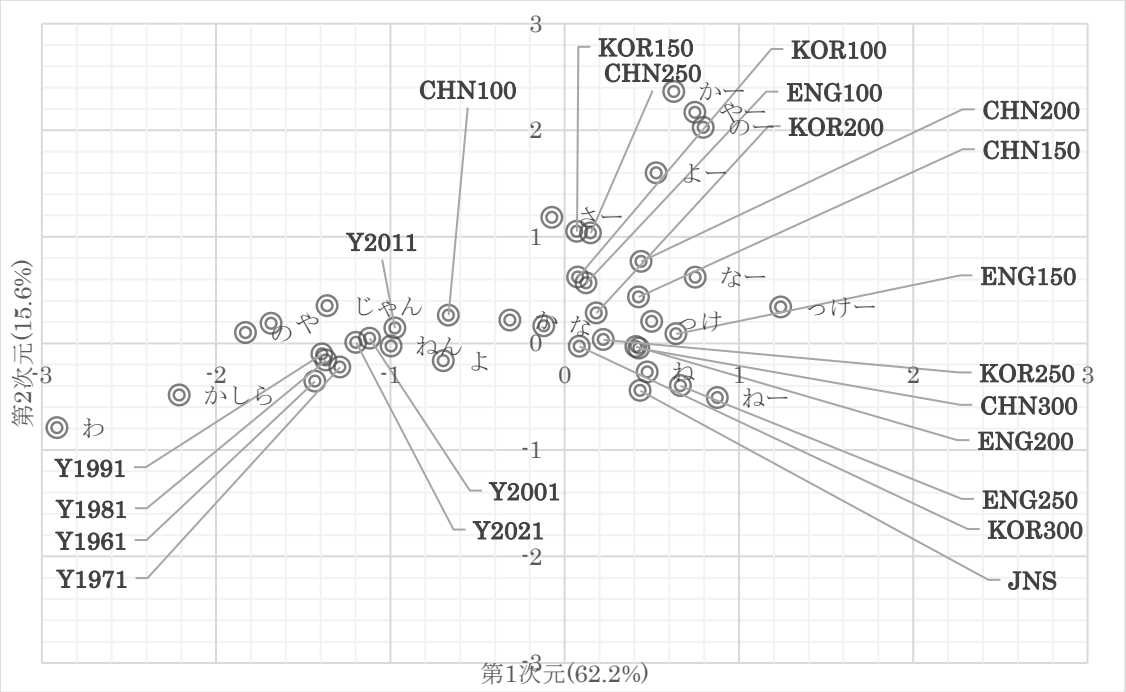
区分	1961～1991 年	2001 年～2011 年	2011 年～2021 年
範囲	Z1：－0.4 以下 Z2：すべて	Z1： +0.4 以上 Z2： 0 より大きい	Z1： +0.4 以上 Z2： 0 より小さい
特徴終助詞	なア，のう，もの，わ，ぜ，なあ，ぞ，い，ねえ，かしら	さ，よお，もん，よー，で	なぁ，ねん，じゃん，さあ，かあ，ねー，っけ

上表より，高齢者を連想させる「のう」，青年～中年期の男性を連想させる「ぜ」「ぞ」，女性を連想させる「もの」「わ」「ねー」「かしら」などが，世紀の変わり目で衰退し，2001 年以降，より中立的な「さ」や「よお／よー」，また女性や子供のかわいらしさを含意する「もん」などが出現し，さらに，2011 年以降になると，従前の終助詞の書記上の多様性が増すとともに（「なぁ」「さあ」「かあ」「ねー」），地域方言的なニュアンスやくだけたニュアンスを有する「ねん」や「じゃん」，また，軽い疑問を表出する「っけ」などが顕著になってきたことが確認できる。下記は各年代の用例の一部である（※末尾コードの BG と GZ は「文学界」と「群像」を指す。数字はサンプルの連番で，具体的作品名は「6121JFIC」のプロジェクトページで公開されている。なお，下線は筆者による［以下同］）。

(1)「この子のことが気にかかってのう、」と言って、母が泣いたと言うのである。（1971_BG_07）
(2)「そうそう、いつだったか弓子さんの演奏をテレビできいたって、うちの娘が言ってたぜ。」（1961_GZ_04）
(3)「あなたにいいお相手じゃないのかしら？…」（1961_BG_03）
(4)「何やんのさ」 兄は、へへ、と笑った。（2001_BG_01）
(5)「…あたし知らないんだもん」（2001_BG_02）
(6)「…あんまりむやみに話しかけるなって言われてんねん」（2021_BG_06）
(7)「なるほど。で、なんてったっけ、…」（2011_BG_03）

最後に，学習者変種と時代変種の統合頻度表を分析し，以下の結果を得た。

図 8　散布図（時代変種・学習者変種データを統合した対応分析に基づく）



第 1 次元上で，I-JAS のほぼすべての学習者群と母語話者が右側に，各年代の小説が左側に布置された。このことは，母語話者と学習者の差以上に，小説世界の終助詞と，実際の発話の終助詞が質的に相違していることを示す。また，第 1 次元の左部では，左側に 1961～1991 年の小説がかたまり，その右側に 2001～2021 年の小説がかたまっている。第 1 次元は，伝統的な書き言葉的・ト書き的・セリフ的発話に出現する終助詞から，現実の自然発話で出現する終助詞への連続的な変化を示す軸になっていると推定できる。

一方，第 2 次元は，先ほどと同様，左部に布置された小説群の分割には寄与していないが，右部について言えば，上部に初中級者（CHN250 を除くとすべて L100～L200）が，下部に JNS と上級者（L250～L300）がかたまっており，言語レベルの高低を示す軸になっていると思われる。なお，学習者の母語の差ははっきりしないが，中国語母語話者は，CHN100 が第 1 次元の左側に入っていたり，CHN250 が第 2 次元の上部に入っていたりするなど，他の母語の学習者に比べると，相対的に小説寄りの終助詞を好む傾向が見られる。この背景として，中国語母語話者は，日本語のドラマや小説からの直接インプットが他の学習者より強い可能性が考えられよう。

上記の観察をふまえると，各区分を特徴づける基本終助詞として以下が抽出された。これらは，変化しつつある日本語の 4 つの文体を反映していると考えられる。なお，前回の考察と同様，第 1 軸上で原点近傍の語は除外している。

表 6 各変種区分を特徴づける終助詞

区分	1961～1991 年の小説	2001 年以降の小説	初級学習者の発話	上級学習者・母語話者の発話
範囲	Z1:－1.4 以下 Z2:すべて	Z1:－0.4 以下 Z2:すべて	Z1: +0.4 以上 Z2: 0 より大きい	Z1: +0.4 以上 Z2: 0 より小さい
特徴終助詞	わ, かしら, の, や,	ねん, よ	っけ, っけー, なー, よー, のー, やー, かー	ねー, ね
対応する文体	古典的な書き言葉の文体	話し言葉に近接した新しい書き言葉の文体	自発性と双方向性の希薄な話し言葉の文体	自発性と双方向的性を持った自然な話し言葉の文体

1961～1991 年の小説では,「わ」や「かしら」などの女性話者を強く連想付ける終助詞が多かったが, 2001 年以降, それらが消え, 性差のあいまいなくだけた「ねん」や「よ」に置き換わる。一方, 実際の発話では, 初級学習者が「っけ(ー)」のようなややト書き的な終助詞や語末を長音化した終助詞を多用するのに対し, 母語話者に近づいてくると, 双方向的な対話を特徴づける「そうです」＋「ね」系の相槌を多用するようになってくる。下記は I-JAS 用例の一部である。

(8) <C>ですね{笑}#<K>はい、それで、自分で、あ、とのに、あ、何しようかなーと思って・・・（CCT50_L200）

(9) <K>お母さんはいつも、「あー仕事がー、あのー忙しいからー、だ駄目だよー」って（CCT60_L200）

(10) <K>にか、帰ってー<C>〈うん〉<K>あのー零点とか十点とかー<C>〈うん〉<K>もうまあーいいやーと〈{笑}〉(CCS60_L200)

(11) <C>えー、中国のドラマと日本のドラマって何か違いがありますか？#<K>そうですねー、日本のドラマは、えっと十話ぐらいで〈あ、はいはい〉、ちょっとーすごいなんか話がまとまっ（CCM51_L300）

(12) <C>{笑}#<K>モノレールに乗って<C>〈えーえーえー〉<K>来ました#<C>あ、朝は早かったんですか#<K>そうですね、えっと、他の、え調査がその〈えーえーえー〉十時からーだったんで(JJJ01)

ここで, 表 6 の左端から右端を現代日本語における小説言語の 1 つの拡張的な時間軸ととらえ, あわせて, 学習者の日本語に見られる「合理化は, 将来, 日本語全体で起こる」事柄の予兆であり（野田, 2001, p.60）, つまりは「留学生の日本語は未来の日本語」（金澤, 2008）であると考えるならば, 日本語小説の終助詞においても, 近い将来, 長音表記が増え, やがては性差や年齢差に関わらず使用できる「そうです」＋「ね」などの終助詞表現が今以上に増えてくるのかもしれない。

5. まとめ

本稿は, 時系列小説データ（時代変種）と日本語学習者データ（学習者変種／国際変種）を組み

あわせて，日本語終助詞の使用実態を計量的に検討した。

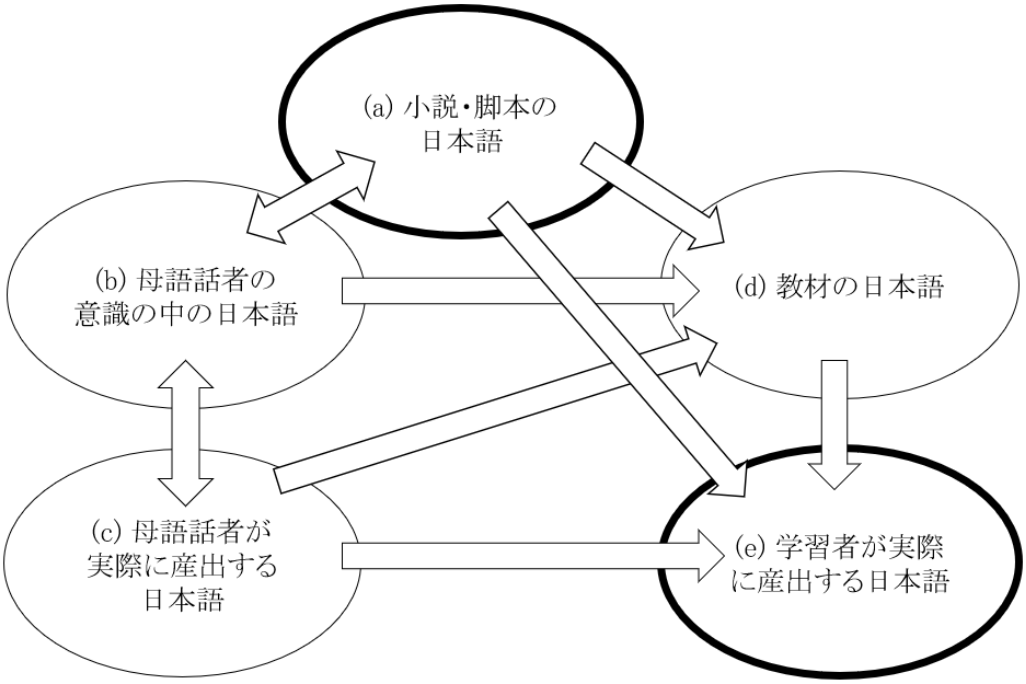
まず，RQ1（終助詞使用量）については，すべてのデータで出現した終助詞が全 66 種となること（表記上の異形を含む），小説中の終助詞トークン数ははっきりした変化が見られないが，タイプ数は 2001 年以降上昇して安定すること，学習者の終助詞トークン数は線型的に増加し，タイプ数についても一定の増加が見られるものの，母語話者よりは遥かに少ないこと，英語母語話者の終助詞使用量が相対的に多いことなどが示された。

RQ2（高頻度終助詞）については，小説において，話者が女性であることを強く印象付ける「わ」から，より中性的な「の」への置き換えが進んでいること，学習者は L200 以降になると「よ」が使えるようになり，高頻度終助詞の内容が母語話者と一致すること，学習者は終助詞の語末を長音にして発音しやすいことなどが示された。

RQ3（分類）については，まず，小説に関して，特定の性別・年齢を想起させる終助詞を多用する 1961 年～1991 年，中立的終助詞が増える 2001 年～2011 年，よりくだけたニュアンスや方言的なニュアンスを含意する終助詞が新規に登場する 2011 年～2021 年の 3 段階で変化が見られること，統合的に見た場合，性別・年齢との結びつきが強い終助詞が多用される書き言葉性の強い小説言語→性差が曖昧になり，くだけたニュアンスを有する終助詞へ置き換わる，話し言葉に近づいた小説言語 →ト書き的な終助詞などが使用され，書き言葉的な硬さの残る初級者の発話→「ね」系の終助詞が多用される，カジュアルで自然な母語話者および上級者の発話，という段階的変化が見られることなどが示された。

本研究により，日本語の時代変種・学習者変種における終助詞の使用について一定の新奇性を有する知見が得られた。ただし，実際に発話されるわけではない小説の登場人物のセリフ中の終助詞の使用実態を日本語研究・日本語習得研究の中にどう位置付けて解釈すべきかは 1 つの課題として残る。テレビドラマの脚本を分析した松下・丸山（2019）は，脚本の特殊性を強調しつつ，自身の研究目的として「『話すことを前提として書かれた言葉』という特徴的な性質を持つ脚本の文体」の解明をあげているが，脚本であれ，小説であれ，それらは一般的な日本語の重要な一部であると同時に，日本語学習者の L2 産出と不可分のものとしてとらえることも可能だろう。下記は，関連する要素の関係を図式化したモデルである。

図 9 小説・脚本資料の日本語研究・日本語習得研究における位置づけモデル



小説・脚本の日本語は，日本語母語話者の意識に影響を受けていると同時に，それを受容する母語話者の意識を上書きし，影響を与える。こうした前提のもと，小説・脚本の日本語が学習者の産出に影響を及ぼす在り方として，4 つの経路が措定される。1 つ目は，学習者が小説やドラマを読んだり見たりすることで，直接，学習者言語に影響が及ぶ経路である（a→e）。2 つ目は，小説・ドラマが母語話者の意識に影響を及ぼし，それを受けて母語話者が実際の発話行動を行い，その産出を学習者がインプットとして聞いたり読んだりすることで，学習者言語に影響が及ぶ経路である（a→b→c→e）。3 つ目は，小説・ドラマの影響を受けた母語話者が教材作成に関与するなどし，その教材を学ぶ学習者言語に影響が及ぶ経路である（a→b→d→e）。4 つ目は，小説・ドラマの影響を受けた母語話者の産出を教材が採用し，それが学習者言語に影響を及ぼす経路である（a→b→c→d→e）。こうして，小説・脚本の日本語は，学習者の直接的・間接的なインプットソースともなりうるのである。このようなモデルでとらえれば，小説や脚本の日本語は，日本語の特殊変種としてそれ自身が研究対象であると同時に，一般的な日本語研究・日本語習得研究の資料としても十分に活用できるものとなろう。本稿で試みた日本語の時代変種と学習者変種（国際変種）の統合分析は，こうした新しい視点の具体的実践であったともいえる。

謝辞

本研究で使用した「6121JFIC コーパス」の開発は， JSPS 科研費（挑戦的研究（萌芽））20K20699「言語から見た日米マインドスケープ比較：データサイエンス志向型小説研究の試行」の助成を受けている。また，本稿の内容の一部は，学習者コーパス研究会（2022 年 2 月 20 日オ

ンライン開催）において口頭発表した。貴重なコメントをくださった迫田久美子教授はじめ，同会の出席者に感謝申し上げる。

引用文献

Ishikawa, S. (2016). Japanese polite sentencefinal markers: *desu*, *desuyo*, *desune*, and *desuyone* —A corpus-based analysis with a focus on frequency, collocation, and functional grouping. In J. Szerszunowicz, B. Nowowiejski, P. Ishida, & K. Yagi (Eds.), *Linguo-cultural research on phraseology Vol. 3* (pp. 537-554). University of Bialystok Publishing House.

石川慎一郎（2019）「現代の男女大学生による文末詞の使用―『BTSJ 日本語自然会話コーパス』所収の会話データの計量分析―」『統計数理研究所共同研究リポート』*414*, 1-30.

石川慎一郎（2021）「『1961-2021 日本語小説コーパス』の構築―日英小説対照研究の新しい可能性―」『英語コーパス学会大会予稿集』*2021*, 7-12.

市村葉子（2015）「『んだよね』の発話意図を解釈する手がかりとは？―発話意図と音調との対応関係に注目して―」『日本語／日本語教育研究』*6*, 149-164.

金澤裕之（2008）『留学生の日本語は、未来の日本語―日本語の変化のダイナミズム―』ひつじ書房.

後藤斉（1996）「コーパスとしての新聞記事テキストデータ―終助詞『かしら』をめぐって―」『東北大学言語学論集』*5*, 37-46.

崔英才（2015）「終助詞『わ』『よ』『よね』の談話上における機能分析―コーパス・データの母語場面の会話を中心に―」『千葉大学人文社会科学研究』*31*, 94-115.

斎藤里美（2021）「日本語母語話者と学習者の終助詞使用の比較―『ね』を中心として―」『人工知能学会 第 93 回 言語・音声理解と対話処理研究会発表論文集』202-205.

迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬（編著）『日本語学習者コーパス I-JAS 入門: 研究・教育にどう使うか』くろしお出版.

滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社出版.

立部文崇・藤田裕一郎（2019）「学習初期段階の『ネ』の学習者ルールとその要因―学習者コーパスと日本語教師発話コーパスの比較から―」『徳山大学論叢』*89*, 19-39.

千葉庄寿（2012）「終助詞『よ』『ね』の連接形の分布と用法特徴について―大規模コーパスによる検証―」『言語処理学会 第 18 回年次大会 発表論文集』595-597.

野田尚史（2001）「学習者独自の文法の背景」 野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子（共著）『日本語学習者の文法習得』(pp. 45-62). 大修館書店.

平山紫帆（2015）「自然会話における終助詞『かな』の用法」『日本語教育実践研究』*2*, 68-79.

深尾まどか（2019）「『わ』の使用に関する調査―世代別データに注目して―」『日本語教育』*173*, 31-45.

朴美貞・横山紀子（2021）「韓国人日本語学習者による終助詞『ね』の習得―インタビュー形式の

自由会話コーパスをデータとして―」『社会言語科学』*24*(1), 220-235.
松下晶子(2019)「テレビドラマ脚本で用いられる終助詞について:年代差・性差・表記差の分析」『コーパスと文体論のインタフェース 2018 発表論文集』1-14.
松下晶子・丸山岳彦(2019)「複数の脚本コーパスに現れた終助詞の比較分析」『言語資源活用ワークショップ発表論文集 』*4*, 19-29.
丸山直子(2015)「助詞の使用実態―BCCWJ・CSJ にみる分布―」『第 8 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』179-188.
山本裕子・小森早江子・本間妙・ラニガン, マシュー(2017)「コーパスシステム Co-Chu の検索比較機能を使った研究事例」『CASTEL/J 2017 予稿集』40-49.
吉田たか(2014)「韓国人学習者の終助詞習得に関する縦断研究」『日本學報』*98*, 51-64.